



CASE 04

製造・加工



mono.ho



2024



※建具とは

建具とは、建物の開口部に取り付けてあるドアや窓、障子、ふすまなどの総称。近年は既製品が使われることが多くなるなど、建具屋は減少傾向にある。小泉社長は「心癒される木の温もりや美しさなど、伝統的な建具の技術は本当に素晴らしいもの。建具の文化・技術を次世代に伝えていくのも使命だと感じている」と話す。工場は小中学生や親子連れらに公開し、木工の実習に高等支援学校の生徒も受け入れるなど、建具やものづくりの世界を若い世代や多くの人に伝える「種まき運動」にも力を入れ、地域とも積極的にかかわっている。

株式会社 岡田建具製作所

事業計画名：
最新鋭ランニングソー導入による
生産性向上と新商品開発への取組み

延べ約2200平方メートルの工場内には最新鋭の工作機械が並び、機械化は効率化だけでなく、安全性を重視し、従業員のけがを防止する狙いがある。ここにも社員ファーストの伝統が息づいている。写真は、本事業を活用して21年に新たに導入したランニングソー。主に木材を丸鋸で切断する機械で、パソコンによる制御機能などを搭載しており、歩留まりの向上にも貢献し、生産管理も容易になった。

最新鋭のランニングソー（木材切断機）を導入し、コスト削減と業務効率化に対応 安心安全に作業できる環境整備と、効率化による他の業務に注力できる体制を確保



建具にとって、木の温もりと美しさも大切な要素の一つだ。同社製品の組子のデザインや木目の趣き、部材の寸法のバランスに、目と心が奪われる。

岡田建具は1967年創業。札幌と近郊の一戸建て住宅や賃貸マンションに設置するドア、キッチン、洗面台などの製作を主に手掛ける。近年は後志管内の二セコ地区の高級別荘の建具も製作。素材に

道産木材（無垢材）、天然の植物油を原料とする自然塗料などを使い、人や環境に優しい製品作りを進める。

小泉雅博社長は「社員ファーストが伝統」と話す。利益は社員に還元し、賞与に反映する基準も具体的に決めているという。建具は工務店や客からのオーダーで作る受注生産がほとんどだが、近年は製作前の段階で工務店と協議する共同開発にも取り組んでいる。自社オリジナル商品の開発にも力を入れ、2021年からは、希望する社員と新商品開発に関する副業

の業務委託契約を結び、商品の売り上げの一部を還元する制度を導入した。現在、社員10人が契約し、就業時間外に作業を行う。ゴルフクラブスタンドやキースタンドなどが商品化され、同社のホームページで販売している。「制度が、社員のやりがいや満足度の向上につながればうれしい」と小泉社長。同社では、社員が考案した新商品を発表し合い、道内の家具販売業者や工業デザイナーが審査員として講評する社内コンペも定期的に開催されており、小泉社長は「みんなものづくりが好きで入社してきた社員。ものづくりの面白さや醍醐味をあらためて感じてもらいたい。社員のアイデアを掘り起こす機会として今後も続けていく」と力を込める。

建具や木製製品の加工の多くは、まずパネル状の木材を大体の寸法に切り分ける作業から始まる。これはランニングソーと呼ばれる、コンピュータ制御された大きな切断機を使う。本事業では、最新鋭のランニングソーを導入して業務の効率化・迅速化を図り、労働コストの削減と従業員の負担軽減を目指した。

**事業の背景** 木材の切断工程において、工作機械の老朽化による稼働率低下などの課題が山積

製作工程の最も基礎的な段階「板材の切断」において、ランニングソーと呼ばれる切断機の老朽化により、次のような課題があり、早急な対応が求められていた。

①**生産性低下とコスト増加リスク**=ランニングソーの動きが悪くなる、故障しやすくなることなどからの稼働率の低下、不良品の発生リスクの増加、繁忙期の残業時間増加、事故など労働災害発生リスクの増加。

②**新商品開発・販路開拓に時間を回せない**=ボトルネック工程に、多くの従業員が手間と時間を取られ、新製品の開発など新しいチャレンジに注力できない。

③**産業廃棄物である木くずの排出量**=処分料引き上げによるコスト増、焼却処分による環境への負荷。

実施内容 作業時間の短縮、コスト削減などの成果を見込んで、最新鋭のランニングソーを導入

最新鋭のランニングソーを導入し、加工精度・スピードの向上を実現したことで、続く仕上工程に要する作業時間も大幅に短縮できた。主力商品であるフラッシュドア（戸の形に骨組みを作り、その両面に突き板等の薄い表面材を張ったドアのこと）の製造では、仕上工程の作業時間が約5分間/枚短縮できるよ

うになった。同社では年間約10,000枚のフラッシュドアを製造することから、この製品の製造ラインだけみても、社員一人の労働力に換算すると年間で約5カ月分相当の人的リソースの捻出に成功した。

事業成果 業務効率化を実現、社内の人的リソースの最適化につながり新商品の開発に成功

人的・資金的なリソースを捻出できたことで、新商品の開発や、WEBを活用した工務店向けの建具のオーダーシステムの構築などに力を傾けられる態勢が整った。大きな成果の一つとして、道産材の合板とアクリル板を使った卓上パーティション「パテコ」を開発。パテコは支柱を1本にし、反対側はアクリル板の下部を小さな台に置く形で、他にはない温かみのあるパーティションとして大きな注目を集めた。また、導入したランニングソーでは、切断時に効率的な「木取り」を行えるようになり、端材の発生を大幅に抑制できた。発生した木くずも効率的に

収集できる機能が搭載されており、再生利用できるような処理が可能で産業廃棄物の排出量抑制にもつながった。



同社で作ったオリジナル商品の一つ、木製キャンプ用車載家具「パンファンチャー」が、北海道が主催する2024年度の「新技術・新製品開発賞」デザイン部門で優秀賞に選ばれた。パンファンチャーは軽バン自動車用の車載家具。車に積み込めば、マイカーをキャンピングカーのように使える商品だ。

VISION

建具の技術を活かし、社会に、未来に役立つ製品を
社員のものづくりの意欲を後押しする環境を整えたい

代表取締役
小泉 雅博 氏

私たちは古き良き技術を大切に守りながらも、常に新しい技術や革新を取り入れ、人々の暮らしに寄り添い、いつまでも愛され、親しまれる建具を作っていこうと

考えています。伝統は守っていききたい、かつ、新しいモノ、変わりゆく社会や時代に通用するモノも作っていききたい。お客さまに喜んでいただきたい、かつ、従業員が楽しく働ける職場にしたい。お求めやすい価格で商品を提供したい、かつ、社員にも満足できる収入を得てもらいたい—欲張りかもしれませんが、そんな思いを少しずつ、ただし、ひとつとして諦めることなく実現することを愚直に目指してまいります。

変えるべきところは変えるが、変えてはいけないところはしっかり受け継いでいくというのが私の考えです。大手メーカーの既製品と差別化を図れば、まだまだ伸びしろはあると考えています。他社ができない物、私たちにしかできない物を作れる会社であることが、岡田建具の最大の強みです。製作前の段階で工務店と協議したり、工業デザイナーと連携したりする共同開発にも取り組み始めていますが、さらに一歩進めて、地域の皆さん、北海道の皆さんと一緒にアイデアや思いを聞き取りながら、今までに存在していないプロダクトをゼロから創り上げていく事業にチャレンジしたいと考えています。

**COMPANY DATA****株式会社岡田建具製作所**

TEL.0123-32-2805

FAX.0123-33-1257

<https://okadatategu.com/>

●所在地：〒061-1409

恵庭市黄金南1丁目313番地40

●代表者名：代表取締役 小泉 雅博

●資本金：3,600万円

●従業員数：28名（2024年11月現在）

●設立：昭和42年（1967年）5月

●事業内容：木製建具・造作家具の製作・施工



小泉社長（写真右）と設計部企画担当の佐藤誠弥さん。「一目見て、これは岡田建具の作品だなとわかるものを作っていきたい。私自身は職人ではありませんが、腕利きの職人と二人三脚で、自分たちがイメージしたものをどれだけ世に出せるのか、ものづくりの挑戦ですね。「産みの苦しみ」はありますが、それ以上に楽しいですし、やりがいもあって、可能性しか感じない」と笑顔で力強く言い切る。